

幸田露伴研究

——「雪たたき」を中心に——

渡辺賢治

はじめに

幸田露伴の大正期から昭和期にかけての作品は、端的に言えば史伝に仮託しつつ縁起や連環の中で生きる人間像を中心に描かれている。

例えば、昭和七年に発表した「プラクリチ」（七月一日『改造』）では、明治二十三年当時のように阿難と摩登伽女の話に自らの内奥を重ねるといったものではなく（一般若心経第二義註^①）、『首楞嚴経』を始めとする複数の経典に拠りながら阿難や摩登伽女の人物像に焦点が当てられており、いわば史伝としての色彩が強い。それは『頼朝』を始め「運命」や「蒲生氏郷」といった一連の「史伝もの」におけるように、歴史上の人物を史料に拠りながら叙述するスタイルを踏襲している。また初期作品との接続が認められる中において、「幻談」（昭和十三年九月一日『日本評論』）のように現実世界と幽玄世界の表裏一体を示す世界も描かれている。「観画談」（大正十四年七月一日『改造』）に繋がる系統の作品でありながらもその作品世界は深化しており、後期露伴文学の多彩な一面として認められる^③。

こうした中、露伴は「雪たたき」（昭和十四年三月一日、四月一日『日本評論』）を発表した。そこには一つの縁起を基軸に様々な境遇における人間が交差、連環し、鮮やかに描かれている。後の慶滋保胤と大江定基を中心とした「法縁微妙」な人間模様が展開する「連環記」（昭和十六年四月一日『日本評論』）発表へと続く途上において、注視すべき作品の一つと言えるだろう。

周知の如く、後期露伴文学の検証は露伴文学全体の中でも、とりわけ未開拓な部分が多く、課題が山積している。本稿では「雪たたき」の作品世界の考察を通して、その一端を検証することを目的としたい。

一、執筆の経緯

「雪たたき」執筆に際しては、昭和十四年一月末に『日本評論』の編集長である下村亮一が露伴宅を訪問しており、その時に露伴の方から執筆への意志があったという。

「幻談」の翌年であった。一月の末、露伴を訪ねると、向うから、そろそろ何か書いてもよいという気持が、そつと漏らされた。私は「幻談」以後、自分から露伴に、無理に作品を依頼することはやめようときめていた。きつと創作の意欲が出ることもある。その時を間違ひなく捕え、それをものにすればよいと、心にきめていた。そんな時、露伴から創作への意欲、がはっきり表示されたのである。

（『晩年の露伴』^④）

「幻談」発表以来、下村は露伴に対し次回作を期待していたようだが、自身から「無理に作品を依頼することはやめようときめていた」という。あくまで露伴からの創作意欲を尊重し接してきたようである。ちなみに露伴はその後下村に対し、「雪たたき」執筆のための典拠を探すように指示をしている。

「うむ、考えていることがある。その種本が、『史籍集覧』という本の中に、雪タキの事」という一節があるのだ。君、それを、これから探し出してくれ、君がそれを見つければ、取りかかってもよい」というのである。

露伴の書庫は、二階の書齋につづく八畳の間に、多くの桐の本箱と共に、無雑作に積まれていた。露伴は自分の寢室にも本箱をならべていたが、最後まで自分の蔵書を他人に見られることを嫌っていた。この時は、きわめて自然に、私は書庫にはいり、『史籍集覧』をさがした。『史籍集覧』は、案外たやすく見当たった。（『晩年の露伴』）

この『史籍集覽』が「雪たたき」の典拠となるわけだが、その中に収載されている「足利季世記」の中、「畠山記」の「雪タ、キノ事」が作品の典拠となっている。「雪タ、キノ事」とあるように、露伴はこの題名を踏まえて「雪たたき」としたのであった。なお「雪タ、キノ事」は僅か千字に満たない短い文章であるが、露伴の生み出した「雪たたき」の作品世界は上、中、下と三章構成で分けられている。

「雪たたき」の執筆開始は下村と共に伊豆旅行を経た後の二月十三日であり、その六日後の十九日には『日本評論』の発売日となっていた。それでも十四日いっぱいまで締め切りを延ばし、『日本評論』三月号と四月号に分けて掲載されることになった（『晩年の露伴』）。

作品の内容についてだが、大雪に行き悩む青年武士木沢左京が下駄に挟まった雪を落とそうとして、ある小門に寄り下駄の歯を蹴りつけたことが偶然にも秘密の合図と勘違いされ、ある屋敷内に引き入れられる。屋敷内に入った木沢は瞬時にすべてを察し、部屋から女人の最も大切にしていた笛を持ち去り、併せて堺の納屋衆の一人である臘脂屋の留守をあずかる妻の不義を知る。そこから物事は展開し、笛をもとに豪商と木沢との駆け引きを経て木沢の出陣が可能となる。戦いは木沢方の優勢に進み、敵方の城が落ちた夜に臘脂屋の家に京の公卿方の首が投げ込まれるという話である。

また作中時代は戦国期の明応二年（一四九三）となっており、貿易港である自由都市堺を舞台に展開している。なお史伝ものを発表してきた露伴だが、中世とりわけ室町期（南北朝期）を舞台にした作品を発表するのはこの「雪たたき」が嚆矢であった。ただし、発表以前に詳細に調べていた形跡が「運命」（大正八年三月二十八日『改造』）の一節から窺える。それは洪武帝と九州の懐良親王との外交折衝における場面であるが、「洪武帝十五年、太祖日本懐良王の書に激して之を討たんとせるを止め」から「一個優秀の風格、多く得可からざるの人なり」の間に約五五〇字にも及ぶ括弧内注記で施されている。

懐良王、明史に良懷に作るは蓋し誤也。懐良王は、後醍醐帝の皇子、延元三年、征西大將軍に任じ、筑紫を鎮撫す。菊池武光等之に従ひ、興國より正平に及び、勢威大に張る。明の太祖の邊海毎に倭寇に擾さるゝを怒りて洪武十四年、日本を征せんとするを以て威嚇するや、王答ふるに書を以てす。（中略）洪武十四年は我が南朝弘和元年に當る。時に王既に今川了俊の爲に壓迫せられて衰勢に陥り、征西將軍の職を後村上帝の皇子良成王に譲り、筑後矢部に閑居し、讀經禮佛を事

として、兵政の務をば執りたまはず、年代齟齬するに似たり。（中略）此事我が國に史料全く缺け、大日本史も亦載せずと雖も、彼の史にして彼の威を損ずるの事を記す、決して無根の浮譚にあらず。

明の靖難の変に際しての倭寇にまつわる懐良親王や征西將軍良成王の事績、北朝の九州探題である今川了俊のことなど、詳細な言及が成されている。だからこそ括弧内の注記に留めたのであるが、約五五〇字にも及ぶ点は特異と言える。「運命」執筆時点において、既に南北朝期や室町期に対し意識が向けられていたものと推察される。

二、作品世界 — 縁起を基軸とする人間交差 —

「雪たたき」各編の考察だが、先ず上編では「応仁、文明、長享、延徳を歴て、今は明応の二年十二月初」の宵の頃、主人公である青年武士木沢が大雪の中、下駄に挟まった雪を落とそうするもなかなか取れず癩癩を起こしている場面から始まる。木沢は「エーッ」と叱咤して雪を振り払うも取れない。そのような中「これではいけぬと思うより早く橋を渡り越して其突當りの小門の裾板に下駄を打當てた」ところ、音もなく門は片開きに開き、中から出てきた女の手に導かれていく。ちなみに、この場面は典拠となる『史籍集覽』では次のように記されている。

或時大雪降シ時ナヤト云アキ人ノ門ヲトフリケルニ、夜イタクフケテ後ニアシタニ雪ノツキケルヲ名屋カ小門ノ板ニテタ、キテ落シケレハ内ヨリ戸ヲ開テ袖ヲ引テ行モノアリ、

右引用文から窺えるように、露伴は典拠に抛りながら描いていることがわかる。なお『史籍集覽』では冒頭に「畠山尾州ノ嫡子尚慶ハ大和ノ奥郡ニカクレテオハシケルカノ侍木澤ト云ノ有、尾州生害ノ後、如何ニモシテ主ノ本意ヲ達シ」云々とあり、既に木沢の身分や志が示されているのだが、「雪たたき」では中・下編において具体的に明かされていない。

多少の驚きはあったものの、木沢には「何んな運にでもぶつかって呉れう、運といふものの面が見たい」という気持ちであった。本文ではこの「運」や「運の面」に身を任せつつも強い信念を貫いて生き抜く木沢の意志が認められる。いずれにせよ偶然にも下駄のある屋敷の戸に当たることが「不思議の運」となり、その後の物語展開へと接続していく起点となっている。

侍女に導かれ室へ通された木沢は、「美服の美女」と対面する。その美女は「年はまだ三十前、肥り肉の薄皮だち、血色は激したために余計紅いが、白粉を透して、我邦の人では無いように美し」い人物であるが、木沢の「にッたり」としながら対面する様子に鋭い目つきで接する。なおこの美女が臙脂屋の妻であつた。

暫しの沈黙を経て、「憎悪も憤怒も次第に裏崩れ」た妻は人違いの者を屋敷へ入れてしまったことに気付き、「まことに相済みませぬ疎忽を致しました。御相図と承わり、又御物ごしが彼方様其儘でござりましたので」と侍女共々謝罪し、「御勘辨料差上げ申します」と木沢に述べる。なお『史籍集覽』では次のように記されている。

是ハナヤト云町人高麗エセウハイニ渡リケル留守ノ間タ夜ナク他ノ人ナヤガ妻ノモトヘカヨヒケル忍妻(夫カ)アリケリ、カノ忍フ男ノ門ヲタクト思ヒ木澤ヲ引入タル、

妻は主人が高麗に行つている間、他の男と不義を犯していることが明確に記されている。その際の合図が、偶然にも下駄の歯を蹴りつけた木沢と合致してしまつたのである。ちなみに露伴の場合、不義に関しては「にッたり」「御勘辨料差上げ申します」というように間接的な表現で示している。

全てを悟つた木沢は「おのれ等」と言い放つても感心し、「これほどの世間の重寶を、手ずからにても取り置きすることか、召使に心まゝに出し入れさせること、(中略)アア、人の主たるものは然様無うては叶わぬ」と漏らす。この木沢の予想外な感想を契機に、臙脂屋の妻も「紛れ入り者」の木沢が臙脂ながら何者であるかを理解し始める。なおこの場面では木沢の感心や臙脂屋の妻の様子は『史籍集覽』には一切記されていない。『史籍集覽』はあくまで物事の筋を列記した形で記されているのみである。

以下、室を見回した木沢は「由緒ありげな笛が紫絹を敷いて安置されてゐた」ことに注目し、妻女と侍女が頭を下げた隙を見て「手早く笛を懐中して了つて歩き出」していく。この笛が後々の伏線となつていく。ちなみに臙脂屋の主人は先に挙げたように「海の外」すなわち高麗にいたのだが、木沢との関係は「昵懇」の関係であつた。

続いて中編であるが、ここでは冒頭「南北朝の頃から塚は開けていた。(中略)山名氏清が泉州守護職となり、泉府と称して此処に拠つた後、応永の頃には大内義弘が幕府から此地を賜つた」云々というように、露伴は貿易港堺の特色について多くの分量を割いて詳述している。先述したように、この部分は露伴が「運命」執筆時から南北朝や室町期に関して、ある程度調べていた痕跡があつたと推察される。

中編では主に「由緒ありげな笛」を奪つた男すなわち木沢の素性並びに、臙脂屋の妻の不義を老主人が知つたこと、それを一身に自らの落ち度とする侍女の忠義な姿勢が描かれている。

「五十余りの清らかな顔の、福々しい肥り肉の男」である臙脂屋老主人「福々爺」が戻り、侍女の普段とは異なる様子から事の詳細を聞くに至る。そして侍女は「何も彼も皆わたくしの恐ろしい落度から起りましたので」と妻を擁護する姿勢を持つのだが、結局は侍女の不可解な説明に老主人が臙脂屋の妻すなわち自身の娘の不義を理解する。「わたくしの飛んでも無い過ちからでござりまして」と自らを責める侍女に対し、悶え苦しむ老主人は「よいく、そなたを責めるのでは無い。訳が分からぬから聞くまでじゃ」と自責の念に駆られる侍女をなだめる。こうした侍女の姿勢は、

心の誠といふものは神力のあるものである。此の女の心の誠は老主人の心に響いたのである。

というように「心の誠」であり「神力」のあるものとして老主人の心に響く。悶え苦しむ老主人は「甘さも苦さも無くなつて、ただ正しい確乎とした真面目」な表情になる。ちなみに、この場面では侍女の「弁才」や「伶俐」、「忠義」さが最大限に發揮されている。また不義を知つた際に「大動揺」した老主人の態度にも注目すべきであり、「我を失つた」状態でも「大努力し」て「満身の勇気を振り起し」た姿勢を堅持している。怒りに身を任せることはせず、必死にそれを抑えているのである。例えば「いさなとり」等、初期露伴文学においては不義を犯す女性が魔的存在として描かれ、同時にそれに籠絡される男が描かれているが、既にここでは不義に直面しても「大努力」と「満身の勇氣」で乗り越えていく姿があつた。もちろん夫ではなく自身の娘という老主人の立場では位置関係が多少異なるが、いずれにせよ「一切の事情は洞察されたのであつた」とあるように、老主人は娘の不義を知りながらも受け止めている。なお老主人と侍女のやり取りは露伴の創作であり、『史籍集覽』では先に挙げたように「留守ノ間タ夜ナク他ノ人ナヤガ妻ノモトヘカヨヒケル忍妻(夫カ)アリケリ」と記されるのみである。

下編では、いよいよ笛を媒介に木沢本来の目的に向かつて動き出す。冒頭では「主客の座を分つて安らかに対座している二人」というように、老主人が木沢から笛を返還すべく木沢のもとを訪れる。木沢の家を知つたのは侍女の尾行であつた。以下、話し合いが展開するのだが、注目すべきは応仁の乱勃発後の下克上に満ちた世相の話題

に触れながら交わされる木沢と老主人の見解の相違、つまり武士と商人という見解の相違が表出する場面である。

応仁の乱の勃発に際して老主人は「損得勘定が大きな分け隔てを致しましたらう」と述べたのに対し木沢は、

其の損得という奴が何時も人間を引廻すのが癪に障る。損得に引廻されぬ者のみであつたなら世間はすらりと治まるであらうに。

というように、常に人間が「損得勘定」に引き回されていることを要因として挙げている。この「損得勘定」は「ケチ」という言葉でも用いられている。また木沢自身「道も知らぬ、術も知らぬ、身柄家柄も無い、頼むは腕一本限りの者に取つては、気に食わぬ奴は容赦無くたき斬つて、時節到来の時は、つんのめつて海に入る。然様したスツキリした心持」という剛毅な性格が顕著であり、決して「損得勘定」で動かない人物である。それに対し老主人は、自らの商人気質を踏まえつつ次のように話を展開する。

物さしで海の深さを測る。物さしのたけが盡きても海が盡きたではござらぬ。今の武家の世も一ト世界でござる。佛道の世界も一ト世界でござる。日本國も一ト世界でござる。が、世界がそれらで盡きたではござらぬ。高麗、唐土、暹羅國、カンボジヤ、スマトラ、安南、天竺、世界ははて無く広がつて居ります。この世界が癪に触るとして、癪に触らぬ世界もござらう。(中略) 何人が斬れるでも無い一本の刀で癪の腹を癒そうとし、時節到来の時は未練なく死のうまでよと、身を諦めて居らるる仁有らば、いさぎよきはござれど狭い、小さい、見て居らるる世界が小さく限られて、自然と好みも小さいかと存ずる。大海に出た大船の上で、一天の星を兜に被て、萬里の風に吹かれながら、はて知れぬ世界に對つて武者振いして立つ、然様いう境界もあるのでござりますから。

世界観に立つ老主人は木沢に対し「いさぎよきはござれど狭い、小さい、見て居らるる世界が小さく限られて、自然と好みも小さいかと存ずる」と指摘し、自らの商人経験を踏まえて「はて知れぬ世界に對つて武者振いして立つ、然様いう境界もある」とを示す。だが木沢は「如何にも手廣い渡海商いは、まことに心地よいことござらう。(中略) 然しナ、(中略) 最愛の妻が明るうないことを仕居つて、其召使が誤つて……あらぬ男を引入れ」云々と痛烈な反論を加える。老主人も引き下がることなく「金銀財寶、何なりと思召す通りに計らいまして」と手段を選ばず懇願するが、結局木沢は頑なに笛の返還を拒み続ける。このように笛返還に際しての木沢の態度は、金銀

財宝であろうとも一切受け付けず「損得勘定」には一貫して毅然たる態度を見せているのである。

こうしたやり取りが続く中、故管領家の臣丹下備前守の弟丹下右膳が二人の前に現れ、木沢の笛を返さない理由が主家である故管領家すなわち畠山家再興の志が根幹にあること、併せて戦準備が整わず出陣が叶わないことが判明する。さらに丹下の進言によつて臙脂屋から援助を受け出陣可能となるも、木沢は断固拒否を続ける。

ちなみに木沢は、

若輩の分際として、過言にならぬよう物を言われい。忠義薄きに似たりと言わぬばかりの批判は聞く耳持たぬ。損得利害明白など、其の損得沙汰を心すずしい貴殿までが言われるよナ。身ぶるいの出るまで癪にさわり申す。そも損得を云おうなら、善悪邪正定まらぬ今の世、人の臣となるは損の又損、(中略) ナ此の木澤左京が主家を思い敵を悪む心、貴殿に分寸もおくれ居らうか、無念骨髄に徹して遺恨己み難ければこそ、此の企も人先きに起したれ。それを利害損得を知らぬとて、奇怪にまで思われるとナ。それこそ却つて奇怪至極。(中略) エーイ、癪に触る一世の姿。

というように、例え主家再興のための出陣が叶つてもあくまで「損得利害」に関わる物事は受け入れない姿勢を堅持する。一日も早い主家再興を果たしたい丹下も木沢にとつては先の老主人同様に「損得勘定」に類する位置づけであつたと考えられる。なお『史籍集覽』では「吾望事ヲ達シ給ハ、笛ヲカヘサント云」というように木沢が笛を返還する代わりに自身の要望を聞くよう老主人に述べている。露伴はあくまで木沢を剛毅かつ信義に生きる姿に重きを置いて描いているのである。

だが、丹下を始め杉原太郎兵衛、斎藤九郎ら同士の必死の懇願に押され、木沢は臙脂屋の援助をようやく受け入れ、出陣の準備に取りかかる。その際、同士達が皆勇み立ち悦ぶ中、木沢自身「損得にはそれがしも引廻されてござるかナ」と「自ら疑うように又自ら歎ずるよう」な様子であつた。今まで断固として「損得勘定」を忌避し、それで動く「二世の姿」に「たき斬つて呉れたい」ほどの憤怒を抱いてきた木沢であつたが、最後は主家再興という大儀を重んずる結論に至つたのである。丹下以下、木沢説得に際しては、先の侍女の「心の誠」「神力」に通ずるものがあつたと言えよう。

以下、木沢ら一行は河内の平野の城将桃井兵庫と客将一色某は討たれ、大和に潜んでいた畠山尚慶を迎えるに至つたことが述べられて物語は幕を閉じる。なお末尾では

「平野の城が落ちた夜と同じ夜に、(中略) 臙脂屋の内に首が投込まれた。京の公卿方の者で、それは學問諸藝を堺の有徳の町人の間に日頃教えていた者だったということが知られた」という形で結ばれている。臙脂屋の妻女と不義の關係にあった男であることが想定される。

木沢の癩癩と共に偶然にも戸に下駄を当てたことが契機となり、笛を介してのやり取りへと展開し、最後は主家再興にまで至る運びとなっている。この木沢の「損得勘定」を嫌う剛直な性格は下克上の戦乱の中にあつて非常に印象的であるが、木沢に限らず臙脂屋侍女のごくまでも妻を擁護し忠義を重んずる態度、また「觀照の周密と、洞察力の鋭敏」とを有し「中々食へぬ」臙脂屋の老主人の存在感、「まだ雛鷄であ」りながらも木沢と共に主家再興に一身賭ける丹下右膳の若き志など、「雪たたき」には戦乱の世にあつても各々の境遇における人間模様が鮮やかに描かれており、まさに「どれにも深い人間性を備えさせている」(塩谷贊『幸田露伴下』) 作品と言える。

しかも作中においては、一つの事件が発生し展開、終了するまでの間に様々な立場から関わる多くの人間像をそれぞれの境遇を踏まえ描き分けていることである。換言すると、一つの縁起をもとに多くの登場人物が交差し展開する露伴の真骨頂が発揮されている。とりわけ露伴が重きを置いて筆を揮った人物として臙脂屋主人と木沢左京であったことは、作品を一読すれば容易に首肯出来よう。自由都市堺の状況を露伴がよく調査して中編冒頭で多くの分量を割いていることは先述した通りであるが、露伴の関心は堺そのものを描くよりも、臙脂屋老主人の人間性を読者に理解させる一つの手段として、堺についての描写が成されたと考えられる。

三、露伴の態度 —— 当代社会への意識 ——

「雪たたき」の発表が昭和十四年ということもあつたためか、当代社会を意識しての執筆であつた可能性も指摘されている。次に挙げるのは露伴と辰野隆との対談である。

辰野 私は「雪たたき」を読みましてね、(中略) あの時代の二・二六事件だなど思つたのです。と云ひますのは乃木將軍が殉死された時、森鷗外先生が「阿部一族」を問もなく書かれたんです。(中略) それで二・二六事件を頭に置いて先生が崑山記を御覧になつて、は、あ成る程と、直接お考へにならなくても、なんだか關係、因果をお考へになりまして、何か機縁になりまして、

幸田露伴研究

ああいふものが出來たのぢやないかと、一寸思つたんでございます。甚だ勝手がましい推測で恐縮ですが。

露伴 大變に貴方は買つて下さつたが、なにそれほど儂は……

辰野は、鷗外の「阿部一族」が乃木將軍殉死を受けての執筆であつたことを踏まえつつ、露伴も「雪たたき」執筆のモチーフには二・二六事件が影響しているのではないかと指摘している。しかし露伴自身、否定的な見解を示している。

周知の如く二・二六事件は昭和十一年二月二十六日、陸軍皇動派青年將校を中心とするクーデターで、内大臣齋藤実や蔵相高橋是清らが殺害された事件である。戒嚴令が公布され鎮圧後に皇道派は肅清され、以後、軍部の發言権が強化された。確かに辰野が指摘するように、応仁の乱勃発を契機に始まつた下克上の戦国時代を舞台にした「雪たたき」との共通点は挙げられる。木沢以下を皇動派、臙脂屋を財閥として位置づけることも可能であろう。なお当時、露伴自身も二・二六事件について、次のように言及している。

反乱軍が反乱軍がと言うが、反乱軍ではない暴徒なのだ。齋藤実は郡司の後輩だつたが暴徒の手にかかつてやられた。最も惜むべきは高橋是清で、こういう人物を殺してはよくできた人がいなくなる。(小林勇『蝸牛庵訪問記』)

このような言及があるものの、「雪たたき」の主眼はそこに置かれている訳ではないだろう。今までの考察から窺えるように、一つの縁起を契機に戦乱の世にあつてもそれぞれの立場で生きる人間の交差、連環を中心として描かれているところにこの作品の主眼が置かれている。いわば「風流微塵戯」や「運命」から脈々と流れる露伴の作風が認められるのである。

その一方で、当代社会を完全に意識せずに執筆したという訳でもないだろう。昔時、露伴は「馬琴の小説と其当時の実社会」(明治四十一年四月三十日『福音新報』)の中で、作家と実社会との關係を次のように述べている。

すべて假作物語の作者と實社會との關係を觀察しますと、極端に異なつた類別が二種あるのであります。一つは其の假作物語と實社會との並行線なのであります。他の一つは其の假作物語と實社會と直角的に交叉線をなして居る。——物語其物は垂直線を爲して居るのであります。並行線をなして居るのは、作者の思想や感情や趣味が當時の實社會と同じであるところより生じ、交叉線をなすのは作者の思想感情趣味が當時の實社會と異なるところより生ずるのであります。(中

略)馬琴に至りますと、(中略)其の著述は實社會と決して没交渉でも無關係でもありませんが、併し並行はして居りませぬのです。(中略)馬琴は實に時代と直角的に交叉して居たのであります。時代の流れと共に流れ漂つて居た人で無かつたのであります。自分は自分の感情思想趣味があつて、そして其の自分の感情思想趣味を以て實社會を批判して書いたのであるといふ事を認めなければならぬのであります。

露伴は作者と實社會との關係を「極端に異なつた類例」として二つ挙げており、一つは「假作物語と實社會との並行線」であり、もう一つは「假作物語と實社會と直角的に交叉線」を成しているタイプとしている。馬琴小説は「時代と直角的に交叉して居た」という特徴を持っており、つまり自身の感情、思想、趣味を背景にして「實社會を批判して書いた」作家であつた点を評価しているのである。もちろんこの視点が全て「雪たたき」に反映されている訳ではない。だが、少なくとも右の内容から「雪たたき」執筆に際して、当代を意識していた可能性を考える余地は十分にあるだろう。それは昔時において、次兄の問題が含まれるもの日露戦争に際して、時局の変化を受けて「天うつ浪」が中絶していることから証左される。

その他、「雪たたき」では先述したように、人間が「損得勘定」や「ケチ」に引き回されていることを要因として挙げつつ、それらとは対極的な木沢の剛毅な性格が描かれている点にも注目したい。

例えば「損得勘定」や「ケチ」に対して、露伴は既に「いさなとり」(明治二十四年五月十九日)十一月六日『国会』において、「仮にも吝嗇する事嫌ひに大袈裟な事ばかり好み(第八)」「鄙な根性出す奴と悪く評判されても(第十)」「我が何時其様な鄙吝な事為た(第十九)」「彦右衛門生れついで卑劣なること邪曲なること大の嫌ひなるより(第八十三)」「天地を卑小な根性より恨しく忌はしく考へ(第八十四)」「逃げたり隠れたり狭小なことを仕ないで何故我には相談をけなかつた(第九十一)」「独を善くする狭隘な思案ながら(第九十三)」というように、主人公彦右衛門の性格を描く際に言及している。また小説「夜の雪」(明治三十一年一月一日『太陽』)においても財産横領を企む養父母に対し少年が「けちな御父様だ」と言い放ち家出する場面が描かれている。さらに「連環記」でも「世の諺に謂ふ『雪隠で饅頭を食ふ』料簡、汚い、けちなことである」とある。どうやら露伴の中には長らく右のような「吝嗇」「ケチ」といった視点が強く意識されていたものと考えられる。

しかもそれは作中のみに留まらず、当代社会にまで及んでいる。次に挙げるのは「幸田博士の日本人改造談」(大正四年十一月一日『日本一』、露伴全集未収録)で、第一次世界大戦勃発時、当時の世相に関して言及した内容である。

▲概して日本人は人間が悪い。先年北海道の或鐘詰業者が、苦心研究の結果、外國製に劣らぬ鮭の鐘詰を製造したので、早速佛蘭西から、多量の注文を受けた、そこで愈よ原料たる鮭の買求めに着手すると、狡猾な日本の漁夫は直ちに一致して、非常な高價を稱へたのである、所が是には鐘詰業者も閉口した、普通の賣價で鐘詰の定價が作つてあるのだから、さう高い原料を買つては利益が無い、寧ろ非常な損になる、併し漁夫の方では

▲約束の日限を經過すれば罰金を拂ふ契約の結んである事を知つてゐるから、中々廉くは賣らうとはしない、併し注文を受けた方では罰金を拂つては商賣の信用に拘はるから、止むを得ず高價な鮭を買つて註文期日の間に合はせたいといふ事である。どうも日本は「兄弟籬に鬩ぐ」の癖が容易に抜けない、何も戦争ばかりが國家の大事ではない、かうした實業上の方面に於ても矢張り相提携して外國に當つてほしい、こんな事では何業だつて發達すべき筈はないのだ。

ここでは鮭の缶詰売買を巡つての「狡猾な日本の漁夫」に関して批判しており、また戦争に対しては「何も戦争ばかりが國家の大事ではない、かうした實業上の方面に於ても矢張り相提携して外國に當つてほしい」と述べており、戦争だけでなく實業においても提携する大切さを指摘している。まさに「損得勘定」や「ケチ」に傾斜した姿への批判である。

以上のような「損得勘定」「ケチ」な人間の姿勢を折々に批判する一方、その対極にある姿は一体何なのか。明確な言及は見当たらないものの、露伴は「日本文学と国民性」(大正十年四月一日『解放』)において次のように述べている。

鎌倉期から室町期に亙る文學のおもてから考へると、文學の實質は前期より低下したかも知れぬが、兎に角に前代文學とは異つて甚だ多趣多様になり、そして此等種々のものを材料として察すると、優美の方面は猶前代の系統を存して相當に多くの歩合を有しては居るが、減少して其代りに剛勇が尚ばれ、且又著しく責任觀や義理といふものに殉ずるを立派なことと考へる所謂武士的情操の新たに加つて來たことを感じさせられる。

右引用の「責任觀や義理といふものに殉ずるを立派なことと考へる所謂武士的情操の

新に加つて来たこと」は、直接「雪たたき」に関する内容ではないにせよ、木沢の性格と一致する。また右引用に続いて露伴は「復讐といふことを美とし、後世に復讐譚といふ文學上の一大科を成すに至らしめたのも、其根源は史的には甚だ古いかも知れぬが文學的には此期に起つたこと」と述べており、鎌倉期から室町期にかけての文學の特質を「雪たたき」に反映させていることが窺える。

いずれにせよ、露伴の当代社会への意識は明確ではないものの、その根底には混沌とした戦乱の世にあつても「損得勘定」や「ケチ」に傾斜しない、「剛勇」や「責任観」や義理といふものに殉ずるを立派」とする木沢のような性格を露伴は提示しているのである。

おわりに

「雪たたき」の考察を通して、作中からは一つの縁起を基軸に様々な境遇の人間が出会い、交差し連環していく鮮やかな人間模様を読み取れる。そこには繰り返し述べてきたように、下克上の戦乱の中、「損得勘定」を嫌い、主家再興に信義を貫く剛毅な性格を持つ木沢左京の生き方、臙脂屋侍女の忠義を重んずる態度、また「観照の周密と、洞察力の鋭敏」とを有する臙脂屋の老主人、若輩の身ながらも木沢と共に主家再興に一身賭ける丹下右膳の若き志などが描かれている。

こうした作風は既に「風流微塵蔵」や「運命」等において示されているが、そこに歴史上の人物を史料に拠りながら叙述するスタイルも加わっており、初期露伴文学からの接続とともに後期露伴文学の特徴も見出せる。ただし冒頭でも述べたように、後期露伴文学の検証は未開拓な部分が多く、今後の研究課題とする部分が多い。

「雪たたき」で成された作品世界は「連環記」においてさらに深化し、多くの人々との縁起を主軸に展開し、作中舞台は日本のみならず中国海南島にまで及んでいくのである。

註

- (1) 「露伴追悼号」として没後に発表（昭和二十二年十月二十日『文学』）。
- (2) 拙稿「幸田露伴研究——『ブラクリチ』を中心に——」（平成二十三年三月『大正大学大学院研究論集』第三十五号）参照。

- (3) 拙稿「幸田露伴『幻談』試論——幽玄世界との境界——」（平成二十三年三月『国文学踏査』第二十三号）参照。
- (4) 昭和五十九年八月経済往来社。
- (5) この点に関して、日沼滉治は『太平記』の世界には正面から立ち向かうことはしなかったことを挙げつつ「直接に言及しないことで南北朝期と室町期の扱いにくさを語った」可能性を挙げている（『露伴九十九章』平成十八年八月未知谷）。
- (6) 明治三十五年五月近藤活版所。
- (7) この投げ込まれた首をめぐる後年、花田清輝「男の首」（昭和三十二年五月『群像』）では木沢左京のものとしており、当代社会との関わりを意識している。
- (8) 徳田武「都賀庭鐘と幸田露伴——一つの『雪たたき』——」（昭和五十五年三月『明治大学教養論集』）。
- (9) この対談は昭和十四年五月十七日、赤坂錦水において行われた対談で、『革新』（同年七月一日）に掲載。
- (10) 昭和三十一年三月岩波書店
- (11) 「いさなとり」の引用文は適宜、パラルビを施した。
- (12) この「幸田博士の日本人改造談」は『露伴全集』には収載されておらず、また『露伴全集』別巻下の「初出目録」にも記載されていない。

本論文は、日本近代文学の黎明期から昭和初期まで活躍した幸田露伴の作家活動を浪漫や写実、史伝などの作風変遷の主な区切りごと括り、初期から後期まで通底している作風や思想がいかなるものかを全八章の構成から検証し、露伴文学の特徴と性格を明らかにしようとするものである。

第一章「生い立ち (慶應三年～明治四年)」では、露伴文学の基盤となる伝記検証を中心に考察した。露伴の出生地や幸田家家系、また当時の幸田家状況などを新資料に拠って究明している。幸田家が江戸幕府に表坊主として仕えていた点については、伝記からの内容だけでなく『武鑑』などの公的資料に拠りつつ検証し、幕末から明治維新の激動期、微禄に変転する幸田家の状況を明らかにした。

第二章「就学時代 (明治五年～十七年)」では、第一章に続く伝記検証で、露伴の就学時代に焦点を当て考察した。修技学校時代においては、露伴の入学年次に限って例年とは異なり、三四十人程度の志願者が集まり次第、順次入学試験が実施されるという変則的状况にあった。また修技学校の生徒は官費生であることから、卒業後には一定の義務年限が科されるのだが、この義務年限も僅か二、三年単位で制度改正が行われている。従来、伝記を始めた先行研究では、余市での義務年限は三年間であることが周知であったが、露伴在学当時の制度を精査すると、実は余市での義務年限は四年間であることが判明した。

第三章「北海道時代 (明治十八年～二十年)」では、露伴文学における最大の空白期とも言える北海道時代を明確にすべく、電信技手として北海道後志国余市に赴任した露伴の動向や周囲を取り巻く状況について検証した。『幽玄洞雑筆』を始め『改正官員録』『官報』『函館新聞』『北海新聞』等、当時の資料や地方紙を駆使し究明した。迎曦塾や東京図書館などで蓄積された漢学の素養に加え、余市赴任を契機に仏典等の知識を新たに吸収した露伴であったが、文壇デビュー時の作風に繋がる素地の確立を担ったのが余市時代であった。

第四章「文壇デビュー時代——初期露伴文学の作風—— (明治二十年～二十二年)」では、余市から「突貫」し突如帰京した露伴が文壇デビューを果たすまでの約一年半の期間を検証した。帰京以来、鬱屈した実家暮らしが続く中、「風流仏」発表を契機に当代文学において一躍脚光を浴びることになった露伴だが、その前には幻の処女作

「風流禪天魔」の執筆があり、根底には露伴の余市体験が下敷きとなっている。

第五章「作風への懐疑・揺籃期——作り物語からの脱却—— (明治二十三年～二十四年)」では、作風懐疑に揺れる露伴の状況を検証し、煩悶葛藤を通して見出した「眞風流の眞小説」という新境地開拓の道程を考察した。坪内逍遙宛書簡では従来の露伴作品が「作り物語」であり、脱却を図るべく新たな視点が提示されている。また「般若心経第二義注」では苦難や欲望に直面しても執着しない人間の生命力が注釈を通して確認されており、同時期に発表した「一口剣」にも反映されている。この当時の露伴の思想は、露伴文学全体に通じる基底部分として位置づけられ、作風の転換点となった。

第六章「眞風流の眞小説」模索の時代 (明治二十四年～三十年代)」では、煩悶葛藤を経て「眞風流の眞小説」見出し、「新露伴」として新たな出発を試みた露伴の作風変遷を検証した。「五重塔」では単に芸道小説という枠組みではなく「因縁假和合」といった視点が示されており、明治二十三年の煩悶葛藤から見出された新境地へと集約されている。

第七章「史伝・考証の執筆時代 (明治四十年代～大正十五年)」では、明治四十年代から大正十五年にかけて『頼朝』や「蒲生氏郷」など、史伝を発表するに至った経緯を検証した。背景には明治二十年から三十年代にかけて発表した「風流微塵蔵」や「天うつ浪」の長編小説の破綻や中絶、そこから完全な創作ではなく史伝に拠りながらも根底には歴史の伝説や風聞にも視点を向けていた露伴の意識が認められる。

第八章「後期露伴文学の作風——初期からの通底と変化—— (昭和元年～二十二年)」では、初期から続く作風が後期作品においてどのような影響を与え、通底しているのかを検証した。初期においては自らの内奥に向き合い「般若心経第二義注」の注解を通して煩悶葛藤からの脱却を試みた露伴であったが、昭和七年発表の「プラクリチ」では、初期に扱った材源を用いながらも阿難や摩登伽女といった歴史上の人物が織り成す縁起や因縁、連環を提示するところに力点が置かれている。こうした枠組みを根幹に据えて発表されたのが「連環記」であった。

以上、各章の考察から露伴文学全体を眺めた際、初期から後期まで通底する骨子として、縁起や運命の中で生きる人々の姿や人間の生命力が漢文調や仏教的色彩を帯びながら作品に反映されている。いわば余市時代の塵労を源として、明治二十三年に煩悶葛藤を通して見出した人間の生命力や縁起の理は、「眞風流の眞小説」といった新たな作風提示を転換点とし、変遷変化を遂げつつも後期露伴文学にまで波及し、縁起と連環を主軸とした作品へと大成されるのである。